

腹をたてていたのが消えてしまった

男の子三人も、私立に入れるお金は、家がないので、京太は行かしてもらえなかった。

あれは、僕が中一の時、京太は小学校六年だった。

京太は、悲しそうに、家の裏で、僕に、「兄ちゃん、僕も行きたいわ。なんで、あかんのや。」と、こっそり言っていたのを、僕は思い出した。

僕はどう答えたらよいのか困った。

そのまま、しばらく、二人黙って、家の縁側から庭を眺めていた。

もの寂しい晩秋で、庭のかえでが紅葉し、庭は落ち葉がいっぱいだった。

それを思い出していると、自分の恵まれてるのに、つくづく気づき、いつの間にか、昼間の、腹を立てていたのが消えてしまった。